



木下 貴史

代表取締役

「いつも自分を支え、助けしてくれた周囲の方々に感謝の気持ち伝えたい」。

そう語るのは、株式会社ガンシンで代表取締役を務める木下貴史だ。社員と地元を愛する、木下の半生に迫った。

親元、地元を離れて

高校時代までを山口県岩国市で過ごし、多くの友人に囲まれて育った木下。地元への愛着はあったものの、18歳のとき、親元を離れ単身アメリカに留学することを決める。

言葉が通じない、知り合いも一人もいない土地での暮らしはすべてが初めての体験だった。最初は洗濯や食事の用意すらままならず、いかに甘えて生活してきたのかを思い知らされた。少しずつ生活に慣れ、身の回りのことができるようになってくると、今度は学費や生活費を負担し、海外で勉強できる環境を与えてくれた家族への有り難みを実感する。学校で知り

合った日本人の友人と集えば、自然と家族への感謝が話題となり、「少しでも早く恩返しをしなければ」という思いは日増しに強くなっていったという。

桁違いの規模の大きさ

1995年（平成7年）、22歳でアメリカから帰国すると、東京の建設会社に就職した。木下は地下鉄駅の新設工事を担当する。

「既に着工から5年が経過していましたが、地下を掘る工事が始まっていなかったのには驚きました」。

もともとは一つの駅をつくる予定で始まった工事だったが、急遽もう一つ駅をつくることになり、設計の段階からすべてをやり直していたのだ。

その後無事着工に至ったが、鉄道インフラが既にできあがっている東京では、駅一つつくるのも容易ではない。付近には山手線、京浜東北線、日比谷線、銀座線、そして東北新幹線のトン

ネルまで通っており、地下にはもう隙間が残されていなかった。そのため、さらに深くまで地下を掘り、既設の駅を補強しながらの作業となる。補強を怠れば稼働中の駅が崩れる恐れがあり、大きなリスクと隣り合わせの現場だった。

「規模も大きければ、やっていることもすごい。とにかく度肝を抜かれる工事でした」。

建設会社の苦勞も魅力もやりがいも、すべてが凝縮されていた。一日1000人以上の作業員が全国から集まるような現場は、山口ではまず経験できない。苦勞は多かったが、その中で得られる達成感や喜びは非常に大きなものだった。

ミス招く正体

「失敗やミスは数え切れないほど経験してきました。建設会社勤めていた頃は特にひどかったですよ」。

段取りや調整不足で迷惑をかけたり、期限に間に合わな

かったり、大事な約束をすっぽかしてしまったときにはみっちりお説教もくらった。「二度と同じ間違いをしないように」と強く意識すると、そちらに気を取られ簡単なミスをしてしまう。その度に何度も先輩や同僚に助けられた。

ある日、先輩が昔の自分と同じミスをしたのを見て「落ち着いて行動しよう」と声をかけた。結果を残さなければという思いが焦りにつながり、空回りしていた自分を思い出したのだ。また、先輩への指導を通して客観的な視点を得られ、自身もそれまで以上に落ち着いて行動できるようになった。

「今もまだ、ミスも忘れ物もしてしまいます。フォローしてくれる周囲の方々に感謝するばかりです」。

故郷へ帰るとき

ともに現場で働く先輩たちの熱心な指導のおかげで、木下は父の会社であるガンシンや土木工事に魅力と可能性を感じていた。

「いつか家業を継ぐだろうという思いはありましたが、自分から言うものでもないの、いつ呼ばれても良いように、今いる場所で全力を尽くそうと思っていました」。

そして、ついにそのときがやってきた。先代社長から「そろそろ家業をやってみないか」と声がかかったのである。ところが木下はその誘いをすぐには引き受けなかった。地下鉄工事もようやく先が見え始めていたため、きつちり区切りをつけたかったからだ。

「自分の実家の都合だけで、周りに迷惑をかけるわけにはいきませんから」。

そして2000年（平成12年）12月、新駅の開業をその目で見届けてから、心機一転故郷へ向かった。

（後編に続く）



企業情報

- ◆ 設立年：昭和23年10月
 - ◆ 年商：20億円
 - ◆ 従業員数：90名
- （※平成30年12月時点）